ふるさとの誇り

其の31

いにしえの栄華を伝える市内最古級の建造物
山梨県指定文化財
法善寺鐘楼

法善寺鐘楼

今回紹介する鐘楼（しょうろう）がある法善寺は、若草地区加賀美にあります。

周辺は、御勅使川扇状地の伏流水に恵まれ、古代から水田が開け、市内でも最も遺跡の分布が濃い地域のひとつです。すぐ北側では、その起源が遥か中世以前に遡る「十日市」が毎年開かれていて、この地域が昔から人の行き交うとても栄えた場所であったことを伝えています。

平安時代の終わりには、秋山光朝や小笠原長清、南部光行、そして源頼朝が厚く信頼した大弐局（だいにのつぼね）※1たちの父、加賀美遠光がこの地に拠点を構えて繁栄しました。

現在の法善寺は、この加賀美遠光の館跡と伝えられています。承元2年（1208）、遠光亡きあと、孫の遠経によって祖父の館跡に寺が移されたものといわれ、お寺自体も「加賀美遠光館跡」として市の指定文化財となっています。

お寺は、戦国時代には武田信玄の信任も厚く繁栄しました。また、法善寺に残されている絵図によれば、江戸時代までは法善寺の周囲には、20を超える塔頭（たっちゅう）※2が取り囲んでいたことがわかり、当時の壮大な規模を知ることができます。

法善寺の鐘楼は、山門をくぐった東側、池のほとりに建っています。

鐘楼は、自然石の礎石の上に四本の柱を立て、下層は吹放ち、上層は四周に縁を巡らせた簡素な形式です。東西の柱の間隔は3・2m、南北は2・74m。高さは7・9mあります。

鐘楼の建てられた正確な年代はわかっていませんが、その素朴で豪放な構造や手法から、室町時代の建設とすることができます。

屋根を除き、殆どが、建築当初からの部材で、四隅を支えるその立派な柱には、数百年の風雪に耐えた歴史が刻まれ、手を触れた私たちを遠い過去に導いてくれます。

法善寺は、天正10年（1582）の武田家滅亡の際、織田軍の焼き討ちに遭いそのほとんどの建物が焼失してしまいましたが、鐘楼はその中で唯一残った建物と、お寺では伝えられています。

鐘楼に架けられた梵鐘は、身の高さ約1・1m、直径約0・9m。製作年代は13～14世紀と推定されており、こちらも長い時を刻んでいます。

室町時代の建造物といえば、本市では、国の重要文化財に指定されている八田山長谷寺（はったさんちょうこくじ）（大永4年（1524）建立）が有名ですが、この法善寺鐘楼も市では最古級の木造の建造物として、市の豊かな歴史を我々に伝えてくれています。

なお、法善寺鐘楼は、平成6年度～平成7年度には解体修理工事が行われ、それまでの茅葺から銅板葺の屋根に改められています。

法善寺鐘楼昭和15年頃

法善寺

法善寺境内図（江戸時代　周囲を数多くの塔頭が取り囲んでいる）

※1 大弐局：鎌倉幕府の歴史をつづった『吾妻鏡』にも登場する女官。甲斐源氏の加賀美遠光の娘で、将軍御所に仕え、源頼朝の子息で将軍職を継いだ頼家・実朝の2人の養育係として重要な役目を果たした、鎌倉幕府の中でもトップクラスの女官といえる。

※2 塔頭：本寺に付属する小寺院。子院、脇寺。